
お・り・が・み 虹色の伝え手

石坂金代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お・り・が・み 虹色の伝え手

【Nコード】

N7663U

【作者名】

石坂金代

【あらすじ】

俺は転生した。転生した先は林トモアキワールドだった・・・つて、ここチートキャラ多過ぎなんですけど！？ マスラヲしか知らない主人公が、おりがみを原作ブレイクしないようにしてマスラヲまで頑張るお話です。

プロローグ（前書き）

初めての執筆なので、応援よろしくお願いします。

プロローグ

「おいアヤメ、沙穂さほが何処に行つたか知らないか？ 先ほどから姿が見えないのだが」

自室でくつろいでいると、一人の青年が入ってきた。細身にまとうのは開け放した黒いジャケットとスラックス。裾を出した白いカッティングシャツ。銀縁の角メガネの奥には、切れ長の鋭い目つき。

この青年の名は伊織貴瀬いおりたかせ。このデイズーランドの半分ほどの広大な敷地を持つ屋敷の主であり、現在の自分の雇用主である。

「沙穂ちゃん？ 俺は特に見てないぞ。何か用事か？」

「ああ、今から名護屋川鈴蘭なぐりがわすずらんを迎えに行く予定でな。沙穂にも同行してもらおうと思つていたんだが」

『名護屋川鈴蘭』

その名前を聞くと、やはりここは『お・り・が・み』や『戦闘城塞マストラヲ』の世界なんだと再認識させられる。

「そうか・・・いよいよか」

そう、おそらく原作が始まるうとしている。気が遠くなるような長い時間を経てついにこの時が訪れた。初めてここが物語の世界だと認識したのは、俺が転生してしばらくたってからだった。

転生する際、俺は神様から間違って殺したお詫びだと言われて、所謂チート能力というのをもらっていた。

よくアニメの主人公の技や武器、たとえば『無限の剣製』だとか、アンリミテッドライトワークス
ゲイトオブヒロン『王の財宝』だとかをもらって、俺TUEEEEEEE！をする転生者が多いと聞かされていたんだが、俺はそんなことより平和に暮したかった。

だから『どんなことがあっても怪我や病気をしない頑丈な体』と『どんな物からも逃げ切れるだけの速さ』、『金運』の三つをもらった。

「何か言ったか？」

貴瀬がこちらに声をかけてくるが、何でもないと答え溜息をつく。

そう、そこまでは何も問題なかった。しかしここからが問題だ。のんびりとした平和な暮らしを望んでいた俺は、あるうことかこんな危険な世界へ転生してしまった。原因は俺の選んだ能力だった。

考えても見て欲しい。

『どんなことがあっても怪我や病気をしない頑丈な体』と『どんな物からも逃げ切れるだけの速さ』、この二つは普通の人間には到底無理な能力である。

だから俺は魔人として生まれた。もう何年前になるかはわからない

いが遙か昔、まだこの世が魔王制になる前のことだ。

生まれた当初は愕然としたものだ。何せ俺の背中からは人間にはありえないものが生えていた。白い翼だ。

それからしばらくの間（といっても人間では考えられないほど長い間だが）俺は神からもらった素早さと翼で、俺が生まれた所の主の奥さん、その使いパシリをやらされていた。それに嫌気がさして逃げてきた時に、出会った人物がみーこだったのがわかった時に、ようやくここが林トモアキワールドだと知った。

まあ、それからいろいろあったがここでは割愛させてもらおう。

「では沙穂に『伝えて』くれないか。玄関で待っているからすぐに来い」と

「りょーかい」

そういつて俺は神器『ケリユケイオン』を取り出し。沙穂にメッセージを伝える。

「・・・あー、『沙穂ちゃん？　なんか貴瀬が出かけるから付いて来てほしいって。・・・うん、玄関で待ってるらしいから。・・・はいはい、じゃあねー』」

どうやら沙穂は森の中にいたらしい。ていうかこんなことにケリユケイオン使わせるな。携帯持たせろ。・・・まあ沙穂が携帯を使うところなんて想像できないけど。

「今から行くつてさ」

「そうか、出は僕も行ってくる。君は新入社員のためのメイド服を用意しておけ、ククク・・・」

うわー、悪そうな笑み。さすが悪の組織。ただのメイドバカなだけかも知れんが。

「てか、そんな急に言われても用意できないぞ？俺の予備ならあるけど・・・」

言葉通り俺は今メイド服を着ている。転生する前は男だったけど、今は女になってしまっているのだ。最初はかなり焦ったけど、今じゃそれほど違和感もなく生活してる。喋り方が男っぽいのはそのせいだ。

「それで構わん、彼女の背格好は君と同じくらいだ。サイズ的には何の問題もないだろう」

「了解した。まあうまくやってこいよ」

「ククク、君に言われるまでもない。では行つてくるとしよう」

そう言つて貴瀬は部屋から出ていく。

「・・・よし、じゃあ俺も準備するか」

ちなみに俺はマストラは何回も読むほど好きだったが、おりがみの方は読んだことがなかった。だから、俺はこれから何が起こるか知らない。

だからとりあえずの目標はあんまり原作ブレイクしないようにして、マストラヲ世界までたどり着くことだ。

・・・もうすでに原作ブレイクしてるなんてことはないよな？

プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグ終了。

今回は、まだ心がきれいだった聖魔王閣下が出てきます。

不幸少女

Side：三人称

吾川鈴蘭は不幸な少女だ。

生まれたばかりの彼女は、生みの親に孤児院に捨てられた。

しばらくたって里親に引き取られたが、後に義父が事業に失敗してしまい酒におぼれて離婚し、その後義母について行ったが、その義母も鈴蘭が中学生になると新しい男を作り、何処かへ行ってしまった。

そしてしばらくは義母の親類縁者のところをたらい回しにされ、そのせいで転校が多く、中学生時代はまともに友達もできなかった。

ようやく名乗り出てきた、生みの親の兄弟だと言う男は借金を鈴蘭に押しつけて夜逃げした。つまりただの詐欺師だった。

（もう誰も・・・誰も信じるもんか・・・！）

アパートに帰ってきた鈴蘭に残されていたのはわずかな家具と、二千万という途方もない額が書かれた借金の証文だけだった。

静かすぎるのが嫌でつけたテレビの中では、今日も『神殿教会』の司教であるフェリオール司教が映っている。

白地に金系の入った衣装、銀灰色の髪、色白で細面の・・・清廉

を現したようなその姿は、女子中高生のアイドルになっているのも頷ける。

そしてその背後にはライトアップされた白亜の建物
神殿が建っていた。

『信じていたきたいのです・・・』

若き司教のその声だけが、テレビの前で泣いている鈴蘭の耳に木霊した。

『つまり、現実・・・観念的なものでなく本物の神が降臨すると・・・フェリオール司教はそうおっしゃっているのですね?』

インタビュアー興奮した声とともにカメラが教会の上空を映し出すと、そこには青白いもやがかかっていた。オーロラか、虹か、その青い色だけを取り出して滲ませた様な、まさしく神秘的な色だ。

ヘブンズゲート・・・神がくぐると言われている扉だ。科学では説明のつかないそれこそが、一年ほど前に突然現れた彼ら、神殿教会が単なる新興宗教に留まらない一端であった。

『はい。預言者様の御神託によりますと、残すところ一週間と』

『では・・・一週間後にあそこから神が?』

『ええ、一週間後です・・・ですがそのためにはある人物の祈りが不可欠なのです。今夜こうして放送させていただいてるのは、その人物の心当たりを尋ねたいからなのです』

『その人物、とは？』

インタビューが息を呑み、マイクをフェリオルの元へ寄せる。

『鈴蘭という名の少女です』

画面の中の若き司教と目が合い、鈴蘭は総毛だった。

『名護屋川鈴蘭という名の少女です』

しばらく沈黙が続く。

司教の目が逸れ、鈴蘭は脱力した。鈴蘭は鈴蘭でも、彼女は吾川鈴蘭であった。過去に名護屋川なんて姓を名乗ったこともない。

『それだけ・・・でしょうか？』

『私どもの得た手がかりはそれだけです。ですが信じれば、きっと主はあなた前に』

どうでもいいことだった。

神がいるなら。救えるものなら今この私を救ってほしい。でも救われなんてしない。明日からどうやって過ごせばいいかわからないこんな時に、鈴蘭は神なんか信じることができなかった。

（死のうかな・・・）

そんな考えが際限なく浮かんでは消える。

その時ドアを乱暴にノックする音が耳にはいった。

ドアを開けた鈴蘭が何か言う暇もなく、ガラスの悪い男が二人土足で踏み込んでくる。そのうち派手なスーツ姿の男が横柄に命令した。

「ようし、金目のもん全部運びだせ」

「へい兄貴」

そしてヤンキーに毛の生えたようなジャージ姿の青年が、家財を一つ、また一つと持ち去って行く。

しばらくのあいだそうこうするうちに時計は十一時を回った。

「あらかた片付いたな・・・で、いくらになった？」

「へい、五万とんで百と五円だそうです」

「ぶっ！」

鈴蘭は思わず嘔き出した。あまりにも安くて。

そうしてギロリ、と兄貴と呼ばれていた男が鈴蘭の方へ向く。

「そついつわけだねえ、お譲ちゃん。二千万には全然足んねえんだわ」

「ひっ……！」

ぽん、と肩に置かれた手に鈴蘭は身をすくめた。こういう時の相場くらい鈴蘭だって知っていた。

「悪いけど、身体売ってくれねえかなあ？腎臓とか二つある奴から頼むわあ」

（うわぁ……いきなりばら売りですか……）

そうして鈴蘭が絶望しかけた時、

どがあっ！！

突然ドアが吹き飛び、弟分を下敷きにした。

「な、なんだあ、いったい！」

「そこまでだ、チンピラ」

見るとそこには銀縁メガネの青年
踏みつけ部屋の中に入ってくる。

伊織貴瀬がドアを

その後ろから、鈴蘭と同じ年頃の、メイド服で癖っ毛の少女が入ってくる。その手には日本刀を持ち右目にはバンダナを巻いている。

「な、何なんですかあなたたち！？」

鈴蘭はいきなり現れてドアを破壊した二人を前にしてパニックになっている。

「ん？僕か？僕はこういう者だ」

貴瀬が鈴蘭に名刺を渡す。とりあえずそこに書いてあることに目を通した。

「え・・・と、『伊織魔殺商会いおりまっさつしやうかい 会長兼企画兼経理兼広報兼営業 伊織貴瀬』・・・？ 何ですかこれ？」

それを聞いた兄貴は目をしばしばさせている。

「ま・・・さつ、商会い・・・？ それが何だってんだ！ ああぐふえ！？」

兄貴が言い終ると同時に、貴瀬が顔にストレートを一発。そのままにやにやと笑いながら自分の正体を告げる。

「悪の組織だ」

不幸少女（後書き）

主人公が二話目にしてでてこないだと・・・！？

次話も主人公は最初だけかなー

悪の組織と借金

鈴蘭に着せる予定のメイド服を用意するために歩いていると、前方を小さな女の子がこちらに背を向けてくと歩いているのを見した。

「おーい、リップルラップルー」

俺が呼びかけると立ち止まってこちらを向き、無表情ながら愛らしい瞳をぱちくりとさせている。その髪は青みがかかったような黒髪で、とてもかわいらしい。

（やばい・・・、抱きしめたい・・・！）

少し邪な感情が浮かぶがそれをすぐに打ち消す。

「何か用なの」

「いや、別にこれと言って用事は・・・あ、そういえば貴瀬が鈴蘭迎えに行ったの聞いた？」

こくこく

「聞いたの。でも、これといった感想はないの」

「まあ、おまえだったらそう言うと思ったけどさ。もうちょっと興味示そうぜ？ 仮にも魔王候補なんだしさあ」

「そんなことで揺らぐ、わたしではないの」

やれやれ、と首を振りまた歩き出す。しかしその時見た横顔は無表情ながら、どこか楽しそうに見えた。

（ここ最近暇だったからなあ・・・）

多分これから少しは退屈を紛らせそうだからであろう。

「それに、魔王候補といっても、ただのお飾りなの。そのことは、アヤメもよく知ってるはずなの」

そう言ってリップルラップルは地下の方へ行った。多分、貴瀬に頼まれてたものを作っているのだろう。

「それもそうか・・・。さて貴瀬達は今頃ついたところかな？俺も準備しに行くか・・・」

○

悪の組織。

目の前にいるメガネの青年は確かにそう言った。

「つてえええ・・・！ な、何だデメエ！ やるってのか!？」

「もうやったんだ、僕は」

（な、何なのこの人！？）

鈴蘭の理解が及ばない間に、目の前では事態が続いていく。

「野郎・・・おいテル！ 何時まで寝てやがる！ やっちまえ！」

「へ、へい！」

そう言ってドアを押しつけたチンピラは、腰の後ろから短刀の様な刃物を取り出す。しかしそれまで人を刺した事などないのか、すっかり腰が引けている。

それを見た貴瀬は薄く笑うと、

「くくっ・・・新品じゃないか。沙穂、少し見せてやれ」

と、刀を持った少女に言う。

しかし、沙穂と呼ばれた少女はぽーとした様子で動く気配がない。それを見た貴瀬は困ったように指先で頭を掻いてから一喝した。

「軍曹っ！！」

その瞬間、少女はびっくりした猫みたく、パチッと眼を瞬かせる。

「得物のみ斬ってよし！」

「はっ！」

伊織のその声で少女の雰囲気は一変する。その顔に浮かぶのは歪んだ狂気。そして何時の間に抜かれたのか、少女の手にはチンピラのそれとは違う、禍々しく黒ずんだ刀が握られていた。

「了解であります、主さま」

少女がそう言ったときには、すでに短刀は根元から斬られていた。チンピラはそれを見て悲鳴を上げて去っていく。あんぐりと口を開けていた兄貴も我に返るなり、ベランダから飛び出してしまった。

「ふん、下らん」

伊織がそう呟いたのを最後にあたりには静寂が戻ってきて、鈴蘭はヘナヘナと座り込む。どうやら腰が抜けたらしい。

「た、助かりました・・・あの、ありがとうございます・・・」

とりあえず今自分を助けてくれた少女の方へお礼を言う。しかしその少女は刀身を揺らしながらこちらを見てソワソワしている。

「斬ってもいいですか？」

「へ？」

「斬ってもいいですか？」

（・・・うつ。この子やば・・・）

目が見るからに怪しい光を放っている。しかし、

「もう終わりだ、沙穂」

伊織の一言で、少女は刀をしまい、しょんぼりと肩を落とす。それはそれでヤバいと鈴蘭は思うのだが。

そうして伊織は鈴蘭の方へ向く。

「君が吾川鈴蘭だな？」

「へ？」

「旧姓は深山・・・その前は木野、と。随分あちこちを転々としたようだな」

貴瀬の言うとおりだった。新しい親が出来るたびに名字が変わり、住む場所も変わっていった。

そんなことを思い出すと、また悔しくなってくる。でも、今は同時にこの青年が来たことによって何か運命が変わりそうな、そんな予感もしている。

「あの、あなたは・・・？」

「君には借金があるな？」

「へ・・・？確かにありますけど・・・」

「二十億ほどの」

悪の組織と借金（後書き）

また主人公の出番が少ない・・・！

悪との契約

あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

『二千万だと思っていた借金が、いつのまにか二十億円に増えていた』

な…　何を言ってるのか　わからねーと思うが
おれも何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「って、いやいや！！　ちょっと待ってください！？　二十億って
そんなことあるわけないじゃないですか！」

パニックになる鈴蘭。しかしそれを宥めるように貴瀬は懷から一枚の書類を取り出し鈴蘭の目の前に突き出した。

「これを見る」

書類には何やら細かい数字がさまざまに合算されていて、最後にそのような桁数の数字があった。

「この最初の親が事業に失敗したのが痛かったな」

そこには里親の義父の名前があり、

「それに、その時の母親も、あとで結婚詐欺にあつて大分借り入れたようだ」

里親の母の名前もある。

「それからだな・・・」

次々と読み上げられる借金の数々。里親の親類の・・・中には聞いたこともないような名前まであつた。そしてとどめに、

「嘘・・・！？ 院長先生まで・・・」

最後の最後まで信じていた孤児院の院長先生の名前まであつた。

「巢立つていった孤児たちの苦勞を放っておけなかったそうだが

」

我が子同様の孤児たちの借金を一身に背負った拳句、首が回らなくなつたらしい。

「・・・私もその孤児たちの一員なんですけど・・・私の苦勞は？」

「そんなことは知らん。つまりだ、そうした諸々の借金を茅づる式に一本化していくと君に辿りついたわけだが」

「でも・・・明らかに私と関係ない人とかいるんですけど？」

「知らん」

「知らないってそんな無茶苦」

ごつ、と貴瀬は鈴蘭の眉間を小突く。

「ったあい・・・」

「それはこっちのセリフだ。大体どうすればその年で億単位の借金が作れるんだ？　せつかく一本化した僕の都合はどうなる？　え？」

ごつん。ごつん。

「も・・・」

ごつん。ごつん。

「もういやあああああつ！　頭に来たんだから！　もう私は誰にも、何にもあげないんだ！　誰も信じないんだ！　死んでやる！」

そう言っつて足元に落ちていた、沙穂の切り落とした刃物を首にあてる。

「みんなみんな私を馬鹿にしてっ！　院長先生まで裏切った！　もうたくさんだよ・・・私はっ・・・」

「まあ待て、もうわかった」

やれやれ、というように貴瀬は手を挙げる。

「確かに、無闇に一本化していった僕も馬鹿だったな。君のように無力な女の子に当たるとは予想外だった」

実のところ貴瀬はわざと理由があつてそうしたのだが。

「まあ君に選択肢をやるう。さすがに今すぐ金を払えとは言わん。泣いても始まらんぞ、とりあえず話を聞け」

「・・・・・・・・」

「一つ目はこの僕に仕えて二十億円分の働きをすること・・・・二つ目はこの場で爆死することだ」

「爆っ!？」

気がつくと、何時の間にやらナイフは奪われ、代わりに冷たい金属塊 手榴弾を渡された。フィクションの世界でしか見たことがなかったが、本物はその威力を語るように手のひらに重くのしかかってきた。

「誰にも何もあげたくないのだろう? これならきれいさっぱり、消えてなくなる。ピンを抜いてレバーを引く、それだけだぞ」

「っ・・・・・・・・」

「まあただしこのボロアパートも巻き添えにするがな。住民も半分は死ぬだろう」

「何を・・・言ってるんですか? あなたは・・・・?」

鈴蘭の目が驚愕で開かれる。

「何を気にする？ 君は今、天涯孤独だ。誰かに迷惑をかける心配もないだろう？」

それを見て貴瀬の目が光った。

「さあどうする？ 僕に仕えるか？ 否か？」

「……どっちも嫌……って、言ったら？」

「悔しいから僕がこのアパートを爆破する。もちろん僕と沙穂が逃げたあとだが」

やばい。この人はほんとにやばい。

目がギラギラしている。

「……そんなの無茶k」

「っ！」

「無茶苦茶は君だ。二十億捨てるんだぞ僕は。命がけで僕を楽しませる。当然だろう？」

「……」

「出来ないなら、僕に仕えろ。二十億稼げるだけの状況を用意してやる」

「・・・・・・・・」

「ごっん！ ごっん！」

「働きます働きますう！ だから叩かないでえ！」

自棄になって叫ぶ鈴蘭。それを見た貴瀬は何故か寂しげな表情を浮かべている。

「・・・そうか。僕が君の立場だったら、死んだ方がましだと思うのだが。仕方ない」

「もういやあああつ！」

○

「これって・・・ベンツですか？」

アパートから出た鈴蘭は目の前の高級外車を見てそう言った。

「ああ。なかなか言い車だろう？ 君も運転してみるか？」

「いや、私高校生なんで・・・免許持っていないんですけど」

「そうか。面白そうだな、運転しろ」

だめだ。この人はどこかおかしい。大体、悪の組織を名乗った時からそう思っていたのだ。この人はマトモじゃない、と。

だがすでに貴瀬は沙穂と一緒に後部座席に座ってしまっている。
なので、仕方なく鈴蘭は運転席に座った。

こうなったら自棄だ。たとえ事故を起こしたとしても、もう関係ない。そう思つて貴瀬の説明通りにエンジンをかける。

「エンジンはかかりましたけど・・・」

「では踏み」

そう言われて鈴蘭はためらいなくアクセルを踏んだ。知らぬがゆえに底付きするまで。

ドガン！！

そして車は急加速し、すぐその交差点でパトカーに衝突する。

「あ、あ、あのあの、ぶつ、ぶつけっ・・・パトパト・・・」

「くっくっ・・・ふははっ、パトパトか。君は愉快だなあ、鈴蘭。
ほら早くアクセルを踏み。きみもまだ捕まりたくはないだろう？」

そう言つて貴瀬は鈴蘭をせかす。

「もういやああああああああああっ！！！！」

こうして始まった警察との鬼ごっこは、ベンツがぼこぼこになり、鈴蘭が公安に目をつけられるまで続いた。

悪との契約（後書き）

次回ようやく主人公が主役に・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7663u/>

お・り・が・み 虹色の伝え手

2011年9月13日19時52分発行